

## 「統合教育」の語彙使用に、思うこと

昨朝、NHKロカルニュースで、宮城県が「統合教育」を来年度更に推進することを取り上げた中で、今モデル的に実施されている様子を見た。

こうした報道では、「統合教育（インテグレーション）＝通常学校に障害を持つ子を迎え入れる」ということのようなのだが、「地域の子どもが地域の学校に通う」という当たり前のことが、あえて「統合教育」といわないと可能でない教育界の現状に、少なからずいつも疑問を感じている。

「統合」の反対語は恐らく「分離」だと思うが、明治以降近代日本の学校教育の取り組みの中で、「障害児・者等は分離して」ということが、今も教育界に根付いているともいえないだろうか。

マスコミ界も教育界も、あまりこの「統合教育」の言葉を、吟味、検証しないで使っているような気がする。

「いじめ」が差別感の一つの現れであることを意識すれば、教育現場で「いじめはよくない」と教えるなら、自ら「統合」という「分離（差別）」の裏返しの用語を、意識せず使っているとすれば、何をか云わんである。

また、ダウン症の子どもが、「統合教育」の名で地域の学校に通っているが、他の子どもとの交わりの時間は給食時間のみ、という話も聞く。統合教育といいながら、実情はまだまだ「分離教育」である。

もちろん、同じ学年の子どもたちや、年上の学年のお姉ちゃんたちも教室に入ってくるという、「統合教育」の効果もあるが、それだけでは本人の教育活動の側面からすれば、何とも寂しい限り……。

今の「統合教育」の現状を知ると、「地域の学校の教室（場所）を借り、相変わらず分離教育を続けているだけですか？」と、教育界の一人、一人に尋ねてみたくもなってくる。

「統合教育」という言葉を使う教育界の一人、一人の意識である限り、障害のある子どもの教育活動が真に地域の学校で取り組まれることは、まだまだ先の話かなと思えてくる。

まずは同じ土俵にあげられないことには取り組むことも始まらないから当分は仕方ないとしても、一日も早く、教育界から「統合教育」という語彙を使う必要のない日が来ることを願っている。

（2005年2月27日 記）